
幻想昔神紀

不知火@小説執筆難航中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想昔神紀

【Zコード】

N7074W

【作者名】

不知火@小説執筆難航中

【あらすじ】

ある世界で生活をしていた一人の男。

二人の姉と一人の妹を持つ剣術と異常な力を持つ男。

見た目はいたつて普通の人間、力は神を凌駕する異端の子

ある日、ひょんな事で現代から1000年以上も昔の世界に送り飛ばされる

世は未だ妖怪が蔓延る時代

背中に漆黒の翼を携えた一人のしがない剣士の話である

第一話 古の田の本（前書き）

作者は文才がないのでかなり文がひどいです。

第一話 古の日本の本

古の日本の本 いにしへ

世は平安時代後期、怪奇現象が「妖怪」と呼ばれ始めた時代である

俺は『雨条 刃』（うじょう じん）

この世界とは別の世界に住む者だ

今、俺は小さな村で怪異の影響を断つなど、他人から依頼を受けそれを遂行する万屋をやっている

「最近はあまり人からの依頼が来ないな

万屋として依頼が来ないのは非常に死活問題である

まるで嵐の前の静けさである

「近々何かあるかね……」

あまり今の環境は変わってほしくないがいずれ変化は来る

「……」は一つ外に出て情報を集めに出ようか

この時代で刀を腰に差しているのは武士だけらしいが俺は仕事柄必要るために普段から腰に剣を差している

着物を整え腰に身の丈ほどの長さの刀を差し扉を開ける

「それじゃ……行つてきます」

返事の返つてこない家の中へ一つ言葉を発し扉を閉じる
外は晴天、日は高く、くすみの一つもない青い空がある
すうつと息を吸つてゆつくりと息を吐く

周りを少しきよろきよろと見て何かがありそうな方向を感覚で決めてそつちへ歩き出す

擦れ違う人たちに軽く挨拶をしたり世間話をしたりとゆつたりと過ぎ

ごす

数時間、人に話を聞きながら歩くといつの間にか村の外に出ていた
だが、まだ日が高いので少し探検しようと思い森の方へ足を運んだ

この後、人生で最も厄介な事に巻き込まれるとも知らずに

第一話 古の日本の本（後書き）

とこり」と第一話でした。
アドバイスを頂けるとありがとうございます。

更新が不定の為次回の投稿1週間以内は約束できません

誤字・脱字の報告や感想お待ちしております

第一話 境界と矛盾（前書き）

これだけ時間を開けたのにこの始末
就職試験を終えて急いで書いたのでかなりひどいです
一応、推敲はしていますがそれでもひどいと思します

第一話 境界と矛盾

境界と矛盾

森に足を踏み入れて約一時間
ある意味、極限状態に陥っている
それはなぜかというと

「完全に迷つたな」

来た道はわからずどこへ行けば出られるのかわからない
迷子という状況、精神力が徐々に削られていく

左へ行けば木々が生い茂り
右へ行けば草木が鬱蒼と茂り
どこへ向かつても同じ風景が続く

「むう……」

一つ小さく唸る

普通の人間なら錯乱してかなり危険な状態だろう

俺はなぜ平然を保てるかというと……

矛盾と定義を弄る程度の能力

言葉で説明できない事と、物事の意味・内容を区別するように限定
されている事を弄れる

元来、人間とは生を受けたら短い時間で老いていはずれ死す

これは自然の摂理で尚且つこれは物事として限定されている「定義」である

つまり俺はこの「定義」を捻じ曲げて無理やり矛盾させたのである

人間は死ぬ、俺はその定義を破壊した

「まあ、死にはしないから大丈夫だが……」

死ぬことに対する心配しているわけではない

なぜ早く出たいかといふと

「家の戸閉まりしてないんだよな」

まあ、要約すると空き巣が怖いわけで
早く帰りたいわけである

「田も傾いて来ているしな、速くしないと

少し駆け足で真っ直ぐ突き進んでみる事にした
外へ出れればきっと帰ることもできるだらう

出られないなんてことはあり得ないだろう

「森なんて迷いややすいだけで一方に向かって進めば出られないはずだ」

気合を入れて走り出していく

だが現実は甘くなかった

数分だが走り続けた

どんだけ広いんだよ」の森……

未だ見えていいる風景は緑一色と言つた具合
森の中である

「はあはあ……くそつたれ……氣味が悪い森だ……」

誰かの能力でも働いているのかとか単に広いのか判らないがとりあえず出れない

かなり息も上がってきて疲れが出ている

空は黒く染まつてきている星が見えて来ている

もう少ししたら本氣で、襲われる、時間帯だな……

その前には何があつても家に帰りたい

妖怪に襲われて、ボロボロになるなんて真つ平御免だからな

「もしかしたらもう少しで出れるかも知れないしな、もう少し頑張つてみるか」

頬を叩いて気合いを入れ再度、脚に力を込め一気に走りだす
暗く足場が見えない獣道を走り続けるのはかなり体力を消耗するら
しく三分もしないうちに足が止まる

「くそっ……本気で奇怪だと思い始めてきたぞ……はあ……」

軽く吐息して辺りを見回す

一寸先は闇と言わんばかりに真っ暗であつた

さすがに俺もこれだけ走れば疲れる

その場に腰を下ろし座る

「ああ～腹減つた～つ！～！」

むしゃくしゃして叫んだ

なんせ昼から何も食べてないのだから当たり前である

探究心と好奇心だけで森に入った自分を呪つてしまいたいと思つた

あまり外からの人に入らないこの森に一人の人間の気配が現れた
おそらくだが普通の人間である妖怪の多いこの森に一人で来た

「一体、何者かしらね……」

もし本当に普通の人間だつたら笑い話にもほどがあるわ
ただの人間が妖怪相手にまともに戦えるわけがない

身体的に考えても能力的に考えても

何せこの世界では能力という潜在的なものがあるがそのほとんどは
妖怪に覚醒する

人間に覚醒することはほんの僅かである

単純に自分が出会つてきた人間の中にはほとんどいなかつたのだ

「どんな人間なのか少し興味が沸くわ」

スキマを開いて気配の元へ向かう
感覚から察するにあまり遠くはない

むしろこつちに近づいてくるぐらいだ
奇襲といつがの悪戯でも仕掛けてみよう

おそらく相手の背後に出来るはずだにこでスキマを開いて

「こんな場所に何用かしら?」

いきなり現れた気配、そして能力の臭い
おそらく、襲われた、

「こんな場所に何用かしら?」

「ただ迷つただけですよ」

背中から感じる相手の気配を探りながら少しづつ振り返る
声からして相手は女、それも中々に若いと思われる

「‘人間’がこんな場所に来たら大変じゃない
「ええ、大変ですよ」

後ろから感じる気配は狩人の気配

間違いない相手は妖怪である、背中を伝う冷や汗に氣味の悪さを感じながら相手とやり取りを続ける

「それで、どうやってここから出るつもり?」

「そうですね……森ここに仕掛けられている結界の発動者を倒して……とかですね」

やってしまったと内心、強く後悔した

一気に空気が張り詰めて周りの木々もざわめき始めている
感じる気配も完全に殺意の氣である
さらに莫大な妖力までも感じる

これは悪い籠を当ててしまったな……

相手は間違いない『大妖怪』である

「面白いわ、ならそれだけの事を言うだけの力を見せてもううわ
「ちつ……厄介な事をしてしまったな……」

腰の刀に手を当て一気に振り返る
振った先は妖怪の首筋

振りかえりと同時に振られたその銀の刀身は完全にひかりの首を捉えていた

普通の人間、いや並の妖怪なら反応できずに斬り落とされていただろ

そり、並の妖怪なら

ギンッと鉄がぶつかる音を上げそれ以上動かない腕により一層力を込め振り切ろうとする少年

「やつぱり一筋縄では行かないか

「普通の妖怪なら死んでたわ」

結界を張つて攻撃を凌いだ

だがそれにしても場数をこなしているのか少年は表情の一つも変えない

「もう少し驚いてくれても良いのに」

「生憎、そういう対処をされるのは馴れていね

「あらそり」

研ぎ澄まされた剣に熟練された太刀筋
相手はおそらく相当な実力者

「厄介なのは貴方だけではなく私も同じような

少し疑問に思つた表情をする少年
私の感覚が間違つていなければ彼の体が発せられるのは妖力でもなく靈力でもないもの

ましてや彼が神な訳でもない

じゃあ一体彼の体からは何が発せられているの？

「何が厄介かは知らないが俺に厄介なところがあるとすればこの凄い身体能力だらつ」

「良く言つわその得体の知れない力が厄介ではないと？」

「どうやら相手を舐め過ぎたみたいだ

並の相手じゃ感じられないようなほど抑えている魔力に気がつくとはな

下手に動くとやられるな

「相手にしているとビックリも口じりも済まないぞ」

「そうね、だから一気に決着を付けるのでしょうか？」

「本気かよ……」

「何で手を引くとこう考えを持たないんだよ

やっぱり妖怪ってのは好戦的で単純な生物なのか
だが相手はかなり知識が高そうだ話して分かり合えない事はないだ
ろ？

「ちよっと待て！」

「何かしら？命乞いなら聞かないわ」

「そうじゃないって」

強く打ちつけられる殺氣と霸気が伝えようとする俺の心を折ってくれ

だけどここで大暴れしてどっちも重傷なんて洒落にならないからな

「今回はお互に手を引くってのはどうだ？」

「あら、それじゃいつまで経ってもここから出られないとわよ

「それくらいは俺の力で何とかしてみるわ」

徐々に当たられる殺気が引いていくのが感じる
きっと俺の言いたいことが伝わったらしい
安堵のせいで軽く吐息する

「つぐづぐ面白いことを言う人間ね」

「それなりに力はあると思つていてもんでね」

彼女は口を扇子で覆い表情を隠している
だがたぶん笑つていてるのだろう田を細くしていいるからな

「少し興味を持ったわ名前を聞かせてくれるかしら？私は『八雲紫』

「名乗るほどないが『雨条刃』だ」

「そり、じゃあ刃、縁があればまた会いましょう」

そう言い彼女は謎の空間に入つて姿を消した
たぶん、助かつた

「なんだつたんだあの化け物……」

嫌な汗が止まらなかつた
下手したら死なない俺でも死んでたかも

「変な想像はあまりしない方がいいな」

わざわざこの場から離れる為に脱出の術を考えよつ……

第一話 境界と矛盾（後書き）

とりあえず、東方キャラの登場と主人公の能力を紹介しておくための回のつもりです。

誤字、脱字や感想からアドバイスまでお待ちしております

第三話 理想郷（前書き）

とりあえずそれなりの推敲をしておりますが
誤字・脱字があるかも……
さらに変な表現も入っているかも……

第三話の始まりです

第三話 理想郷

理想郷

妖怪『八雲紫』に襲われてから大体、一週間が経つた

現在は森の中でひたすら脱出の術を摸索している最中である

「能力で有限と無限の定義を捻じ曲げてみたが駄目だつたか……」

この一週間はずつと様々な事を試していた

空間を矛盾させたり

この脱出の不可能な空間を脱出可能になるかもしれない状態にする
為に定義を弄つたり

それはそれは様々なことに挑戦した

「『』の結界かなり厄介な構造だな……」

「頭がパンクしそう……」

そもそも頭が良い訳でもないのにこれだけ能力を使用したら精神力
が削り取られて昇天しかねない
死なないけどな

さて、次はどんなものを矛盾させて脱出を試みるかな

「あと脱出を試みるなら……」

有と無……簡単に説明するといひの結界の存在を消せるよつに矛盾させてみようじゃないかといひこと

だけど言葉としての範囲が広すぎて消費される力も尋常じゃない……

「一旦休むとするか……」

今のパンクしかけている脳では無理だろうからその場で大の字になつて目を閉じる

あれから一週間、未だ彼は脱出を試みている
はつきり言つてこの結界を破ることは不可能だと思つてゐる

この結界は近き日に完成する『幻想郷』を維持するための結界の試作品だ
その道の達人でもそう簡単には破れるとは思えない

「刃はさほど結界には詳しくなさそつだからまだ掛るわね」

それにも事あることに起きるこの不快な胸騒ぎは一体何だらうか
まさか彼の能力は……

自分の操る『境界』、それを超えるよつなどつもない能力なので

はと少し思考

だがこの結界は外との関係を断つているのだそれを通つてきている
といふ事は……

だが普通に考えてそれほど驚異的な能力が人間に覚醒するとは思え
にくらい
もしそうだとしたら何か異常な所があるはずだ

例えば『死に執着』したりとか

「少し観察してみるのも一興ね」

スキマを開いて彼が視界に入る程度に静かに田を叩いてる

降り注ぐ田差しと耳障りな風の音に邪魔されながら田を闇じ思考を
巡らす
空間を能力使って触れることができないだらうか？

他にも様々なことを定義にしたり矛盾させたりと試行錯誤を行つて
いる

「はあ……やつぱりあの時、命がけで紫を倒すべきだつたかな……
でも勝てる相手じゃないよな……」

吐息して色々後悔している

入るんじやなかつたとか紫を倒せば良かつたとかその他諸々……

だが悔やんだところで現状が変わる訳じやないか

「あ、もう一踏ん張りしようかね!」

ぐつと勢いよく立ちあがり深く息を吸う
ゆっくり息を吐き小さく呟く

「空間と次元の定義を構築……我が名に従い力を行使する……」

今現在に働いている定義を捻じ曲げた、これで外の空間と俺の今いる空間を繋いでそこを通して脱出しようという考え方である
もちろん出れたとしても疲れ果てているため家に帰るのはかなり苦労するだろう
でも今ここで立ち往生するよりかはよっぽじましである

能力が働いている間に脱出に向けて動く

まず刀を手に取り空間を裂くイメージで縦に刃を振り落とす

「頼むつ……！」

強く念じて一気に振り落とす

今、彼は間違いなく能力を行使している
それは間違いなく人間が持つような安い力ではない

これは境界すら凌駕する力

現に今、自分の能力を使ってスキマを開こうとしても全くもつてその予兆が感じられない
もつと言つと体から能力を感じることすらできない

「これは……一体どういつ……？」

能力を封じる力というわけではないのだらつ
ならばなぜスキマが使えない？

答えは一つ、彼の能力がそういつた類のものに干渉できるからである

「すごい逸材が居たものね……」

私が求める理想郷の為に彼を利用しない手はない
彼がいれば『幻想郷』の完成もそう遠くないはずだからである

「雨条刃……面白い男ね」

「あ、これはもしかしたら出られそうだな」

田の前にある空間の裂け田
中に入つて通り過ぎれば出られるかもしれない
別に失敗して空間の狭間を彷徨い続けることになるならそれはまた
どうにかすればいい

「えじや行つてきますか」

やつと家に帰れると思いながら一週間を過ぎた場所に別れを告げ
裂け田の中に入つていくその瞬間

「待ちなさい」

静止の言葉、声の主は女性である

「なんだ紫、今から帰る所なんだが」
「それは見て分かるわ」
「何の用があるんだよ」
「頼み」とを言つて来たのよ

鸚鵡返しのよつと「頼み」と「頼み」と聞いた

俺は彼女がどんな頼みごとを言つて来たのか全く想像できなかつた
なんて言つたつてまだ出会つて一週間の相手だし大層な話もしてな
いし

だから彼女の目的が何か全く予想だにしてなかつた

「私はある夢があるの」

「夢？」

「そう、人間と妖怪が共存する世界を創ること」

「ほお、それはそれは大層、大きな夢があるよ」

「確かに夢物語かもしれないわね、でも実現できる気がするの」

人間と妖怪の共存

それはおそらく人間が猛獸と親しく共存するのと同じ事だらう
だが獸と妖怪では全くもつて勝手が違う

この先の妖怪と人間の関係は『退治する側』と『何らかの怪異を人間に起こす側』のはずだ

つまり妖怪は人間に怪異を与える、人間たちを苦しめる

そして人間はそれに立ち向かい怪異を断つ為に妖怪を退治する
おそらくそれが人間と妖怪の関係であり妖怪の生存し続ける為の必須条件であるはずだ

「あんたの言つてることはとてもじゃないが簡単な話ではないぞ」
「そんな事は百も承知よ、だからこそそれだけの力を持つ貴方に頼
みたいの、『私の描く理想郷を共に創らないか』」

理想郷、読んで字の如く

自分が思い描いた楽園こととでも言えれば良いだらうか

「理想郷か……気が向いたら手を貸すよ」

「連れないので、でもそうしてくれるとありがたいわ」

きっと何か面倒事になるだらうとは思つていたがこんなことになる
とはな

ルの状況に応じた行動……

第三話 理想郷（後書き）

今回は主人公の能力がどんなことができるか公開するために書いた
ようなものです

あまりにも強すぎるような気がしますがもはやできてしまつたものは仕方ない

第四話 客人（前書き）

とりあえず、感想で言われた句読点ですが、人が話している雰囲気が出る気がして敢えてつけない方針にしてみます。

読みにくい「うが」を承ください。

あと、刃の能力に関して活動報告の方に触れておいたので見ていただけると嬉しいです。

第四話 客人

客人

紫の頼み事を引き受けたから、約百年近く月日が流れた

何故そんなに飛んだか？

それはここ百年近くに大層な出来事が無かつたからだ

それで現在は江戸時代と呼ばれる時代である

妖怪が最も活発な時代である

事実、この数日でかなりの数の妖怪に出会った、気がする……

都から一歩外に出ればよりどりみどり、様々な種類の妖怪が居る

——人間なのに知り合いは妖怪の方が多いのは、考えものだな……

最近の悩みである

俺を種族上「人間」にして良いのだろうか？

細かいかね

「深いことは考えないでおこう」

気楽に居た方が、人生長い俺には理に叶つた生き方だろう

今更ながらこの不死化は能力上デフォルトの為に、以前話したのは
推測の範囲でしかない

多分、俺の中で定義だけを弄れる能力だと推測している

「暇だから能力の研究でもしようかね」

実際、まだ未熟な自分は能力の効果範囲やら、発動条件とかはあるまい
り判つてない

ただ人には有り余る力だから、研究しておいて損はないだろう

でも少し嫌な予感がする

因みに俺は今、自宅の玄関の扉の前に立つている

「こ」の感じは……」

胡散臭い感じが胸騒ぎの原因だと思つ

「はあ……」と少しこの溜め息を吐き出し、扉を開ける

「お帰りなさい」

「勝手に人の家に入るな」

あたかも自分の家のよに寬ぐ紫が居た

「あらあら、百年の付き合いなのに酷い言いよつね」

「人の生活スペースに勝手に入る方が悪い」

拗ねた子供のような素振りを見せる紫を尻目に茶の用意をする
魔法を使って焚いた火を使って湯を沸かす
それを見て疑問そうに声をかけてきた

「貴方つて本当に面白い力を持っているのね」

「魔力のことかな」

「それ以外に何があるのよ
「例えば意味不明な能力とか」

呆れた様な溜息が聞こえた

出来上がった急須に入った茶を盆に置き卓袱台に座り湯飲に茶を注ぐ
とても良い香りが部屋に充満する

「んで、魔力が何か?」

「その『まりょく』って何よ?」

「そこからか……

面倒くさいと思った

まあ相手は妖怪だから大陸産の技術はあまり判る分けないが……

軽く魔力と魔術の事に関して講義をしてやつた
あくまで概念的なものと単純な理論だけだが

茶を啜り一息ついた紫が口を開く

「貴方つて外国人?」
「何故そうなる……」

やつぱり千年近くも生きているとボケるのか?
明らか日本人だろ……俺は

そろそろ本題に入つていただくためにお茶を啜り一息ついて口を開く

「で、何の用だよ紫？」

「そんなに身構える様な事じやないわ」

「前は空間把握の演算処理とか言つて妖怪退治をさせやがつて」

乾いた笑いを上げる紫

あの時は本氣で殺してやるうかと思つた

頭の中で何十桁の数字を暗算しながら戦つたんだ
全く迷惑な話だ

「あの時は少し私の計算が狂つただけよ、今回はそつならなによつ
にするから」

「実際、お前の方が頭良いだろ、護衛ならやつてやるが演算とか頭
使つのはお前が適任だろ」が

面倒臭がりな奴つて適任だと判つていても動かないから性質が悪い
そういう奴が大妖怪なのが更に酷い話だ

「今、少し愚痴つたでしょ？」

「そんな事はない」

誤魔化すのは意外と得意だ、あまり好まないが

なんだか段々と話がずれている気がしてきた

「とりあえず本題を話せ」

「今日はお茶しに来ただけよ」

・・まじで」の場にて抹殺してやるつか……

今、全力で殺氣が出そうになつた
「つ」の時は落ち着かなければ

「大妖怪が何故にこんな普通の人間の家でお茶をするんだよ」

「貴方のお茶が美味しいから」

「嘘言うなこのサボリ魔」

「ひどいわあ～」

くそBBAめ……

そろそろ堪忍袋の緒が切れそうだ

「」で一発ぶん殴るぐらいしても良いな?

「内心、殴ろうとか思つたでしょ？」

「なぜ判つた？」

「顔に出ていた」

俺の悪い癖を」の百年で見抜きやがつて……

いや、百年も経てば氣づくか……

「貴方つて意外と顔に出やすいみたいね」

「昔からよく言われてた」

「あり、以外ね結構、無愛想だと思つていたけど
「」の見えて意外と顔に出やすいんだ」

この後、しばし二人で談笑した

第四話 客人（後書き）

とりあえず、今回の回は軽く時代を流す為程度のものと紫との交友関係の発達を書き記したものです。

誤字・脱字がありましたら報告ください
感想もお待ちしております

第五話 友の友は亡靈（前書き）

今回はとても難産でしたw

戦闘シーン書くのはやはり苦手だ……

第五話 友の友は亡靈

友の友は亡靈

いきなりだが花見つて素晴らしいものだと思つ
美しい花を見るつて言つのはとても優雅なひと時だと思つ

「やはり桜は美しい……」

現在、俺のいる場所は、かの西行法師が住んでいた屋敷と言われて
いる場所

この辺は沢山の桜が花を咲かせる

今の季節は丁度その見頃である

俺は屋敷へ向かう階段を上りながら桜を見物している

一応言つておくが、俺は飲み食いしに来たわけではない
本当の意味での「花見」をしにきたのだ

「この淡い桃色の花弁……儂くも美しい」

そんな風にのんびり花を見ながら階段を上ると、静止の声がかかる
声の感じからして少し若い感じのある男の声である

さすがに止まらない訳にいかない為、足を止め声の方を向く

「何者だ」

「他人に正体を聞く前に自分の正体を明かしたらどうだい？」

「人の敷地に入つてきて大層な態度だな」

階段上らないと家主にすら会えないだろうが
こいつにお灸をすわしてやるか

でも暴れると家主に何言われるか判らないからな……

——癪に障るが大人しくするか

「俺は雨条刃、普通の人間さ」

「ほう、普通の割には変な力を感じるぞ」

「こいつも魔力を気取る事ができる口か……」

若干厄介だな

「あまり深い事を気にすると人生、生きていけないぞ」

「黙れ、おぬしよりか生きておる」

「こいつ、まさか人外か……」

でも、饅頭つて例え方が一番納得できそうな変なものの浮いてるし人
外か

「それよりもあんたは何者だ?」

「魂魄妖忌、こここの庭師をしているものだ」

庭師なのに腰に刀差してやがる……世も末つて奴か?

にしても頑固そうな奴だな

話し合いで通してくれそうもないな

「おぬしは一体、何の用で来たのだ?」

「花見だ、桜を見に来た」

意外そうな顔をしやがった

そんなに俺が花見をする様な人間には見えないか

確かに腰に刀差しているから、花見客には見えにくいかもしけないが

「なんだよ花見をしに来たら駄目なのか」

「本気で花見の様だな……」

当たり前だろ、人の家で飲み食いするわけないだろ
一体、俺はどんな扱いだよ

「嘘をついているようには見えないな」

「そんなくだらない嘘なんか言わないって」

意外と話の通じる奴なのか、はたまた単純なのか
初対面だから判らないが、このままなら中に入れそつだ

「だが本当とは思いにくいな」

「お前、人を疑うのは宜しくないぞ、主に人間関係的に」

「だ、黙れ！」

ひゅんと風を切る音と共に光を反射して輝く切つ先が目の前に来た
俺の一言が拙かつたかな？

「貴様をこの場で成敗してくれるつー」

「なんでこうなる……」

おそらく怒らせたと思う

・ 軽くあじらつて家主さんに花見の許可を取るか……

「仕方ない、不本意だが通してもいいわ」

腰の刀に手を掛けて脚に力を込める

「何があつても通さん！」

風を切る音と刃^{やいば}がぶつかる音が響き続ける

戦い始めて大分経つたが未だ互いに傷はない

「へえ、やるじやん」

「おぬしも中々の腕前だな」

こいつの周りを飛んでる饅頭みたいなつて、こいつの魂らしく、
攻撃を行うことが出来る便利なものらしい

・ あの魂が厄介だな…… ただあれを切り落とすと後々面倒なこと
になるな

「どうした、降参か？」

「冗談を、ひよっこが俺に勝てると思つた」

眉間に寄せていぐつと睨んで来る

今の挑発に乗るなんてやつぱりひよつ「じやないか

「わしをひよつ」と呼ぶか、おぬしは

「俺から見ればまだまだだね」

俺が口を閉じた瞬間、「ゴウツ」と周りの空気が乱れ始める
それと同時に妖忌からかなり高めの靈力が感じ取れる

「本氣で来るか?」

「おぬしには手抜き不要と見なした、覚悟しろ」

静かな呼吸から感じる強い殺氣は、おそらく俺を本氣で倒す決意の
示しだらつ

腰を低くし刀を握り締め構えを取る相手
刀を握つたまま何の構えを取らない自分

「本氣出でないと失礼かね?」

「貴様……舐めているのか?」

「いや、本氣になろうか、このままで受け流すか考えていた」

更に殺気が強くなつた

「もうそろそろ来るか……」

体全体に魔力を纏めて魔方陣を発動させる

「かなり久しぶりだが、ちよこつと本氣出してやうつか

「その前に斬るつ！」

地を蹴り一気に妖忌が間合いを詰めてくる
刹那、彼の手に握られた刀が靈力を纏い俺に振り下ろされる

「現世斬つ！！」

自分の刀は間違いなく相手に向かつた振り落としたはず、なのに攻撃したはずの自分が吹き飛ばされていた

「どうした、理解不能みたいな顔をして？」
「おぬし……一体何者だ……？」

目の前に立っていた人間は間違いなく同じ人物であったはず
だが今の男は背中に漆黒の羽を生やし服装も見たことのないものになっている

「何をしたというのだ……？」
「別に大したことはしていない解放時の魔力でお前を吹き飛ばしただけだ」

本当にこやつは普通の人間なのか

「さて、決着をつけようか？」

今の俺つてとても悪役に見える

だって目の前の敵は完全に戦意を喪失している
少しだけ、本当に少しだけ力を解放しただけなんだが

「どうした、降参か？」

「たわけつ！」

「元気だな、威勢はないが……」

このまま剣を振るつても無意味だと俺は思った
俺は刀を收め相手の手元を払う

握っていた刀はその勢いで手から離れ少し離れたところに落ちた

「終わりだ、お前に俺は斬れないわ」

「くつ……」

「通してもらひば」

「勝手にしろ」

膨れ上がる魔力を收め階段を上り始める

しばらく桜を見ながら階段を上ると屋敷が見え始めた

・・・これはこれは豪勢な

敷地面積とか考えたくもないほどに広い
ただごとなく、自分がいる世界とは別の世界のよつた感じがする

「少し寒いな……それより家に人がいるかね？」

気配は感じないが、別の何かを感じる

屋敷の扉の前に立ち人を呼ぼうとした時

「あら、刃じやない」

「お、お前……何故此処に？」

こんな幻想的な所にこんな胡散臭い妖怪が来るなんて

・・意外と風流な奴なのかね

着物はこの時代のものとしては似つかわしくない物を着ていて
髪の色も金色と、明らか外国人としか見て取れない様な奴である

「ここ」の主人とは仲が良いの、貴方は？」

「花見だ、桜が見たくて来た」

「くつ……くく……」

「わ、笑うな！」

そんなに俺が花見をするような奴には見えないかつ！
声に出したら負ける気がしたから止めておいた

笑う紫を尻目に屋敷の扉を叩く

トタトタと足音が聞こえる

「誰かしら?」

「貴女が此処の主人か、どうも花見客です」

「貴方が花見、あつはつは、可笑しくて狂いそうだわ」

このババアいつかぶつ殺す……

内心そう決意した俺である

背後で笑い転げてる紫を発見し屋敷の主人は花のような笑顔で其方を見ている

「随分と楽しそうね紫」

「だつて、この男、あつはつは!」

「てめえ……覚悟しろよ」

もう駄目だ全力でこの大妖怪を叩き斬りたい

ーー我慢の限界だ

「てめえ……覚悟しろよ」

気付いた時にはもう遅かったわ

彼の足元は膨れ上がる魔力で抉れ、背中には四枚の白黒の羽が現れていた

たぶん生きてきた中で最も恐怖した瞬間だわ

「じ……刃、なぜそんなにじす黒いオーラを放つていいのかしら?」「てめえの胸に手を当てて考えろ……」

胸に手を当て皿を開じて考える

・少女考え中・

思考を巡らせて約一分、心当たりが多すぎて思い当たらぬわ

「ま、まずは落ち着いて、深呼吸よ深呼吸」

「ああ、俺はとつても落ち着いているが、てめえを三枚に下ろすためにな」

これは本気で拙いと思つ

変な事言つてないなに、殺氣がどんどん増していくのは間違いかしら?

間違いなら良いのに

「さあ、命乞いの時間は終わつた、三枚になるの!!」
「じつがお好みだ?」

「じつちもお断りよー。」

「紫、お客様を嘲笑うからよ」

幽々子も見方じゃないの!?

確かに怒りの発端を作つたのは私だけど、友人なら味方しきれてもいいじゃない!?

「幽々子も楽しんでないで助けてよー。」

「怖いから嫌よ」

「味方は居ないみたいだな、安心しろ一瞬だ」

「瞬で本氣でこの子、私を抹殺する気なの！？
本氣で殺されそなんすけど！？」

「友人としての一生のお願いよ、幽々子助けてっ！
「じゃあ、美味しい物宜しくね」

やつぱりそうなるのね……

でも命が助かるなら安いものよ

- - 数時間後 - -

やつとの思いで刃を説得し怒りを静めることに成功した
本当に死ぬかと思ったわ

いや、一人じゃ死んでたわ

「本当に怖かつたわ……」

「妖怪が人間を恐れてどうするのよ」「でもあんなの誰だつて怖いわよ！」

あれで怖くないなら一体何が怖いのか聞きたいぐらいだわ
いろいろ聞きたい所も有るけど、今の彼はとてもなく機嫌が悪い
から声を掛けると斬り捨てられそう

幽々子は私がスキマから取り出した和菓子を頬張っている

「それにしても彼は凄い逸材だと思うわ
「そうね……あんな目に遭うのは願い下げだけど
「あの時、に彼が居たら結果が変わっていたかもね」

あの時とは少し前に月で起こした月面戦争の事である
結果は惨敗だったわ

あれはあれで悪夢だ

「月の民百人と彼一人どつちが怖い？」
「刃の方が怖いわ、あれは人間ではないわ」

認めたくもない、あんな恐ろしい殺氣を放つのが人間だなんて
大きく私は溜息を吐いた

屋敷の庭に咲き誇る桜を眺めている

さつき紫を本気で殺そうとしたが、主人である『西行寺幽々子』があーだこーだ俺を説得してきて最終的に俺が押されて今回は手を引くことにした

「今度、同じことがあれば首を切り落として売り捌くか」

今、金銭的にちょっと不憫な俺である
大妖怪の首となれば相当な額で売れるだろう

いや、妖怪なら売れないかな?

「ま、そんな事はそのときに考えるか」

今はこの桜を堪能したい
見ていろだけでとても心が洗われる
風も気持ちいい

「ん、あの桜だけ枯れてるな……なぜだ?」

大きく立派な幹を持つ花を咲かせてない桜が一本だけあつた
寂しそうにだけどなぜか妖艶な雰囲気を醸し出す桜があつた
- - 死の香り……どこかで聞いたことがあるな……
確か、人の生氣を吸い取つて妖怪になつた西行妖とかつて奴がある
つて聞いたことがあるな

まさかその化け桜がこの桜つて事なのか?

「これが噂の西行妖なのか……?」

「あら、聞いたことあるの?」

不意に隣から聞こえた声は幽々子のものだった

白山紹介をしてもらつた時に、彼女は亡靈である事を教えられたが
この桜と何か関係があるのか?
でなければおかしい話だ

「まあ、話を少しだけな」

「そう、じゃああまりこの桜に近寄らない方が良いわ、良い事ないし」

「もう少しよ、まだ死にたくないし（死なないけど）」

そんなこんなで数分間ほど「白玉楼」なる場所に居座つていた
お茶まで出して貰つ羽田になつた

いつもこの時間も生きるついで必要な娯楽だと思つた

第五話 友の友は亡靈（後書き）

主人公がチートとタグに入れているのでそろそろ少しだけ本気を出させてあげようと思つて書いた回です。w

今回出たのは全力の3割程度に考えています

いやあ、戦闘シーンを書くのは本当に苦労しました……
文才がないから言葉が出なくて出なくて

感想等々お待ちしております

第六話 久々の再開（前書き）

活動報告にあんなこと書いたのは良いけどなんだかんだで何とか投稿
かなり急ぎで投稿したので推敲なんてやつていないと
そして ~~ああ~~ ~~ああ~~ な展開
まあ、この小説は刃の生活日記みたいなものだから基本 ~~ああ~~ ~~ああ~~ で
すがね

誤字や脱字があるかもしれません
挙句に表現がおかしかったり、話がかみ合つていなかつたりするか
かもしれません

やつ書つたところがある場合は感想のほうで「報告ください」
では第六話の始まり始まり

第六話 久々の再開

久々の再開

花見を楽しんでから三ヶ月ほど経つた

桜を見るにはあと一年ほど待たなければならぬか……

美しいものを見れなくなるのは心苦しいものだ

幽々子の方からは暇な時に遊びに来るといつて言われたが、興味あるのは桜だけなんだよな

別に人が嫌いとかそういうものではない

「夏になつてから一気に暇になつたなあ……」

桜が枯れて娯楽がなくなつてから家で日向ぼっこをする日々が続いている

本気でやることがない

暇すぎるのも考え方のだな

「よし、今日こそ能力の研究をするか!」

花見に夢中になつていてずっと忘れていた
だが何をすればいいのだろうか……

単に能力を発動すれば良いつてもんじゃないだろ?……

こういう時に同じような意味不明の能力を持つやつがいると楽なんだけどな

「まあそんなこと言つて運良く紫が来てくれるるとありがたいのだけ

どな

「紫じやなくともいいなら教授してあげるわよ」

妙に聞きなれた声、幾度か感じたことのある雰囲気

「ざつと計算して一百五十年ぶりだらつか『涼』」

「つふふ、久しづりね刃」

不意に現れたのは俺の姉の『雨条涼』（うじょう りん）
感じとしては「つよ」 と読むが、親の頭が弱いのかこの漢字で「
りん」と読むらしい

こっちに来て「る」とから何かしら変な能力に目覚めているだらう
ましてやただの人間なのに、一百五十年も経つた今でも生きている
のだ、能力がない方がおかしい

「んで、今更この俺に何の用だ?」

「連れないので、愛しの弟をやつとの思いで探し出して感動の再会
なのに」

「どこが感動だ、人ばこんな世界に飛ばしやがつて、おかげで変な
能力が覚醒しただろ?」

「あら、力の使い方が安定してきているのは、その能力のおかげじ
やなくて?」

「それとこれとは話が別だ、大体なあ……」

□論を始めて約三十分が経過

口論を始めて大分経つた、互いに疲れて終結してしまったところの
が結果だった

「つたく……んで何の用だよ」

「愛しの弟に逢いに来たの」

「あつそ」

全くもつて氣色の悪い姉だ、いい歳してブラコンつて
わいせと恋人探して離れて欲しいものだ

「氣色悪いとか思つたでしょ」

「正解」

「ひどいわあ」

こいつも若干だが紫みたいな性格しているな

「BBA」つて言つても怒らないのは良い所だが

「本当は貴方だけじゃなくて『沁華』も連れてくる気だったの」

沁華つてのも俺の姉だ、以前は凄くおじとやかに聞こえるが性格は
男勝りだ

涼はどいつも俺だけを探していた様子だ
皆のことを探し出したのかな

「『輪廻』はどうした?」

「貴方つてホント妹だけ気に掛けるわね」

「せいやあ心配するだろ」

『輪廻』は俺の妹で治癒術がとても得意なおつとりした少女だ
弁解しておぐが俺は『シスコン』ではないからな

「ううのうて弁解したほうが怪しいとか聞いたな……」

「輪廻も一応は発見したわ、でも来れるとは思えない状態だけど
「なんだ怪我でもしているのか」

「そんな訳ないでしょ、集落で祟められちゃってるのよ」

「ああ、あいつ誰しも構わず治療するから、奇跡の力とか言われてしまふことがしばしばあつたな

今回もその口かな

「それにしても喉が渴いたわ」

「茶は出さないぞ」

「ひ、ひどいわ、刃の鬼畜、外道、サディスト!」

「なんとでも言え」

「俺を執事か何かと間違っているんじゃないのか……
前から家事はすべて俺がやつていたしな

全く、二十歳になつても茶の一杯も淹れられないとは

「というか、茶を淹れないだけで鬼畜なのか」

「多分」

「そんなんで鬼畜とか世の人間の器が小さすぎるだろ」

物欲しそうな顔をする涼を尻目に茶を啜る

「そりいえば貴方、『力』の方は大丈夫なの?」

「『暴走』の事か？」

「ええ」

そういうえばそんな心配があつたな
花見に行つた時に侍の前で使つたつけな

別にこれと言つて体調が悪くなつたりはしなかつたな

「最近はそういうた予兆が感じられないな」

「やっぱり貴方は異常だわ」

能力柄こういうのも消えてしまつたのだろうか

だがあの時に使つた時はかなり安定していた気がした

「感情に左右されなければ安定するのだろう」

「まあ、そういうもんよね」

それで片付けるのはどうかと思つ

俺の力つていうのは『矛盾と定義を弄る程度の能力』のことではなく
発動させると俺の「魔力」や「身体機能」などといった戦闘能力に
関した面を、飛躍的に上げるもののことで

俺や姉弟の間では『天魔』って呼び方している

呼び方の由来は発動したときに、天使のような白い羽と悪魔のよつ
な黒い羽が生えることからだ
単に発動しただけなら黒い羽だけが具現化する

後、いくつかの形態があるのか力を解放すると、羽の数が増えたり

体に刺青が現れたりとする

刺青というか魔法陣の一種で黒い線なんだが……

「なんだかんだ言つて俺つて異常なんだな」

「そう言つたつて所詮は運命とはそんなものよ」

運命とは皮肉なものだ……

なんてかつこつけてみる

実際はこんな体でも便利だと思っているから文句はないが普通というものを体感してみたいと思つたりもする人間つて不思議なものだよな

「貴方つて思考がいちいち変わるわよね

「人の思考を勝手に読むな」

変態め……

「今、変態とか思つたでしょ？」

「だから人の思考を読むな！」

駄目だおそらくこれは「無限ループ」に違いない

こんなグダグダな話をしている前に一つ疑問を解決しよう

涼が登場した時、「紫じやなぐくてもいいなら教授してあげるわよ」と言つた

「紫じやなぐくても」つて見ず知らずのやつの事を呼び捨てにするか？いや、頭の弱い涼ならあり得るか

「貴方つてそんな毒舌だったかしら？」

「時の流れつてやつだろ、つてまた俺の思考を読んだな
「とてもよく表情に出てるわ」

完全に考えが読まれている気がする
もつヤダ」こんな姉

「本当に貴方は顔に考えが出るわね
「お前が出させてるようなものだな
「人の所為にしないでほしいわ」

この野郎……この場であの世に送つてやるつか……

でもなんだか「やれるものならやつてみろ」って言われてる気がする

「それで、私に何か聞きたいことでもあるんじやない?
「そこまで分かっているのか……」
「はやく本題に入らないと飽きてしまつわよ」

一体誰がだよ

言われるがまま渋々口を開く

「お前、紫のこと知つてているのか?
「『お前』じゃなくて『お姉さま』って呼んでくれたら答えてあげ
る」

この瞬間、本氣で人を手にかける」と戸惑いがなくなつたかも
一瞬だけ殺氣を全開にした

これって怒りを爆発させてもいいってことだよね?

「刃、ちょっとだけ落ち着きなさい、」こんな所で暴走されたら止め
よつもないわ

「お前が発火剤だらうが…」

もつもんなこんなで漫才を続けて一時間が経過するのであった

「やつと本題に入れるな」
「で、私と紫の関係だつたつけ？」
「その通り」

最近、「本当の俺」つてものを失いかけている気がする
昔の「冷静沈着で物静かな俺」はどう行ったのだろうか…

何?過大評価しそうだつて?ほつとナ

「まあ、あれよ女友達つてやつよ
「なんだ面白みのない発言だな」
「黙らつしゃい」

「」で、「天敵」とか「好敵手」とかって台詞が出たら面白かったの
に…
思わず舌打ちをしてしまった

涼がどんな奴と交友関係を築こうと俺は知らんが「趣味悪いな」

お前も同じつてか?分かつているつもつだ

「でも、もう一つ知りたいんでしよう?」

「お前、占い師やると儲かるぞ！」

「あら、私が占い好きじゃないのは知ってるはずでしょ」「うへ、

「はつはつは

なんだか俺が話すと話がずれていく気がする

もうやだ、早く涼から離れたい

卷之三

「あひ、偉」

「出すなんて」

「准が手曾共」

このあと田ほじ山に田ほじのクレーターが出来る姉弟喧嘩が続いたのは単なる余談である

勝つたのは俺だけどな

第六話 久々の再開（後書き）

今回の目的は「刃の姉を登場させること」です

少しばかりここでキャラ設定を

名前 雨条 涼

性別 女

年齢 二十歳（全然、年増つて年齢じゃないよ）

容姿 髪は腰まで長く色は淡い青、瞳は赤い、顔立ちはまさしく絶世の美女（作者の中では美人）身長は一六五？と女性にとしては普通、胸は大きい方

能力 これは近いうちに出しますので今は内緒です

まあ、能力は厨二丸出しなので出た時は鼻で笑つてやつてください

感想等お待ちしております

また次回にお会いしましょう！

第七話 不死鳥と異端（前書き）

なるべく原作キャラを出していきたいと思つてゐるんですが、オリジナルが2人以上となるとやはり出る機会が少なくなつてしまいますね

これからはなるべく登場させていこうかと頑張つていきますが
今回はある原作キャラを登場させました

第七話 不死鳥と異端

不死鳥と異端

現在、喧嘩が終息して一息ついているところである
互いに怪我はほとんどないが野生生物が住むのは不可能になってしまった
まつた状態になつた

「まさに焼け野原だな」

「まさに焼け野原ね」

田の前に広がる景色は周囲の草木を焼き飛ばした地獄絵図である

「「「つこやつちやつた……」」

さて、このままだと自然に申し訳ないので修理にかかる

まあ修理と言つてもあつたことをなかつたことにするだけだが
どうやら涼の能力は「有と無を操る」つてことらしい
つまり事実として「有つた」ものから「無かつた」ことにしたり、
事実として「無かつた」ものを「有つた」ものにしたりとかなり万
能な

能力である

「元通りになつたわ」

「すごいな、瞬きしていただけなんだが」

田の前に広がっていた景色が一変した、瞬きしているその一瞬で

これを見ていると色々試したくなるな

例えば何もなことから食べ物が出てきたりすると面白たりじやないか

「便利そうな能力だな」

「そうね、『過去に起きたこと』に対する『便利』ね」

「どういう意味だ？」

「説明すると面倒だし見せた方が早いわね」

そう言つて草を一巻りして田の前に広げる涼
そのあとすぐに巻られた草が意志を持ったかのように動き出して元
通りになつた

「ほお、面白いな」

「IJの能力は正確に言つて『過去の事象の有無を操る程度の能力』
ね」

めちゃくちゃ遠まわしな能力だなもつとストレートな能力はなかつ
たのか
まあ涼にはお似合いの能力だがな

意外と魔力やら体力やらを浪費するりしへりすりと汗が滲んでる
のが窺える

「随分と労力を使うらしいな」

「これだけ広範囲に力行使すればこいつなるわ

それにも体を吹き飛ばされても能力を使えば無かつた事にでき
るといふのはかなり脅威だな

「こういう能力の対処を考えておいた方がいいな

俺も意味不明の能力持ちだがな

「さて、少しだけ休める場所を欲しいわ」

「俺の家は却下な

「ひどいわあ」

だって髪の毛が長い人つてすぐにそこいら辺に抜け毛が落ちるじゃん
掃除するの面倒なんだもの

まあもうそろそろ幻想郷の方へ移住するつもりだし取り壊すつもり
なんだがな

「さて、俺はそろそろ動きだすかな」

「どこか行くの？」

「幻想の郷があると聞いたからな」

そう、百年という昔に出会った胡散臭い大妖怪『八雲紫』が掲げる
理想郷である

俺はその理想郷の創造の手伝いをする代わりにそこへの移住を条件
にしているのだ

ただ未だ理想が完成しているとは思いくらいがな

「あら、あなたも幻想郷に行くの？」

「あなた『も』？」

「輪廻もあつち側にいるわよ」

なるほどな、確かにこの時代に小さい集落とかに医者の類はいない
だろうからあいつが祟められているのか

そもそも戦いにおいても申し分ないしな

なら久々に妹の顔も拝めるのか

「そりや好都合だ」

「どこが好都合のかしら？」

「あつちなら退屈もしないだろ」
「大怪我しても問題なさそうだ
な」

そう、妹の輪廻は医療術に対しても名医と呼ばれる医者なんかでは話にならないほどの技術がある
究極の禁術でもある死者の蘇生すらも成し得るほどだ

面白い場面も見れそうになります行きくなつてきた

「もう幻想郷に入ろうかな」

「輪廻をからかいに行くのかしら？」

「そんなわけはないだろ」

妹を弄る趣味はない

俺の性格つて他者からはどう見られているのだろうか?
今気にすることでもないか

「じゃ、俺は行くぜ」

「小屋はどうするの?」

「好きにすればいい」

「じゃあそろそろひきもひきつわ

「後始末はお前に頼むがな

「じゃあやつぱり止めるわ

ちつ……上手くいかなかつたか
仕方ない暇を見つけて片付けに行くか

今は向こう側に行きたい

今の俺は「好奇心の塊」だからな

あのあと涼とは言葉を交わさずすぐに別れた

得意の高速移動を使って幻想郷の結界の近くについた

高速移動の原理はまた今度軽く説明させてもらひ

「……が我が人生の終点となつたのか……楽しみだ」

格好つけているがあまり深い意味はない

さてこれから色々厄介事が出てくるが

まずは衣食住だ、衣と食はまだ自身で何とかできる住だけはすぐことはいいからな

「やつぱりあの小屋持つてぐらしへきだつたかな」

持つてぐらしへきして使える部分だけを使ってもう一度小屋を建

てるという意味だ

ただこの方法をとると、どんどん家が小さくなっていくんだよな

能力で空間の定義を弄つて広くできないかな
無理ではないだらうけど……

「そんなことより今を楽しむとしようか……では、別世界へ参りつ
腰の剣を縦に一振りすると空間が裂けて真っ黒な裂け目が現れる
我ながら[定義を弄るとはなかなか便利だと思つ

裂け目に入り軽く前進するとすぐに景色は変わりあたり一面が草原
となつた

「これは大自然がおでましだな」

とりあえずこの世界を探検するべく歩みを進める
風に任せて自分の直感と本能に任せて歩きだす

確かにこの幻想郷は人間と妖怪の共存を田指していたはずだ
つまりこここの妖怪は人間を襲う事は……

今まさに襲われそつだからそういう訳でもないみたいだな

「これはびつくり居る低級の妖怪も居るのか

見た目はそつだな熊と虎を足して割る一した感じだ
手は大きく鋭い爪と巨大な体躯、そしてなかなか柔軟みたいだ

ただこれは妖怪と言つよつとか化けものだな

「着た途端に襲われるとは後が思いやられるぜ」

だが所詮は低級妖怪だ

俺の太刀筋の前ではただの的である

腰に差してある刀に手を添え肉眼では視認できない速度で屈合いを放つ

目の前の化けものは弱々しく倒れそのまま体を地に任せた
鮮血が辺りを赤く染める

「でかくとも力がなければこんなものだ」

刀についた血を払つて鞘に收める
さて、気を取り直して探索と行こう

まず近くにある興味をそそるものは……
この竹林だな

「霧も立ち込めているな、迷いやすそうだ」

迷うのはもう慣れたがさすがにこれは入る気もなくなるな
だがそこに何かありそつだから入ることにした

「昔もあつたな興味本意で入つて迷つて酷い目にあつたの

確かあれが紫と初めて会つた日か

意外と昔に感じるものだ、時が経つのは早いものだ

「周りにあるのは竹、竹、竹……」

やばい、方向感覚が完全に狂った
こりゃ迷ったな

しかもここも妖怪の気配がするし……

こんな辺鄙な竹林に人の気配が感じられる

単に箇狩りってだけならこんな所には誰も来ないはず
この辺では迷いの竹林として誰も訪れない場所である

「迷い込んだなら大変な事になる……」

放つておくわけにもいかない幸い気配もそこまで遠くない急げばすぐに戻りつく

この竹林は妖怪も多いから出来ればすぐに見つかってほしい……

すぐ近く、こっちに近づく人と妖の感じを放つ存在

「半人半妖か？だが気配は果てしなく人に近い」

もしかしたら妖術を操る人間でもいるのか？
だがそんなはずはない

元来、妖術とはその名のとおり妖怪が持つ術であると聞いている
それには人と妖怪では力の源が違う

人間には個人に差があれど『靈力』と言われるもののが宿るとされて
いる

そしてそれを用いて様々な力を発揮するのが『靈術』と呼ばれるものと聞いた

その靈術を用いて妖怪を退治するものたちが『陰陽師』と言われるもの

逆に妖怪には『妖力』というものが宿り
それは妖怪の『力』そのものであるとも言える

生きた年数が長くなればなるほどその強さは増していく

「だつたらこの人間から感じる妖氣は一体……？」

長い思考を続けていると人影が少しづつ浮かび上がってくる
感覚的にさつきから感じた奇怪な人間である

影の形からして性別は女、体系はとてもじゃないが大人とは言えないと、むしろ子供っぽい

背はあまり高くなく体のラインもあまり女性らしくない年齢的には十五歳ほど

徐々にはつきりと見えてくる、長く白い髪、札のようなもので束ね

ている

赤いもんぺをはいた少女である

「なんだ、こんな辺鄙な所で少女がいるなんて
「あんたこそなんでこんな場所に?」

「この子はこの竹林に住んでる的なパターンか……
それとも地形に詳しいのか?」

見た感じ戦いを出来そうな体つきではない、華奢な方だろう
色白で愛らしい顔をしている

「なぜ……か……好奇心としか言えない」
「好奇心でこんな危険な場所に来るのか……」

そう言われてもな……

俺自身その場の感情で動くことが多いからな
特に好奇心や探究心は強いほうだと言われる

「にしても面白い場所だな、入つて大した経つてもいらないのに迷う
なんて」

「今、自分がどういう状況だか理解している?」

「いや、全くしてないな」
「……あんた馬鹿でしょ」

馬鹿とは酷いな、こう見えてもかなり勉強であれば上位のほうだ
かといって一位でもないが

学業は苦手だったんでな

「とりあえず適当に歩いていれば出ることも出来るだらう」

「そんな事言ついたら餓死するよ」

「大丈夫、訳ありで死にたくても死なない体だから」

死なないと言つた途端に目を丸くして仰天する少女
死なない人間なんて学術上でも歴史的にも珍しいだらうな
というかありえない話だからな

「あんたも死なないのか」

「正確には『死ねない』だがな」

彼女の口ぶり、おそらく同じく訳ありで不死なのだろう
見た感じ大分長く生きている雰囲気も感じたからな

「そういえばまだ名乗つてなかつたな、雨条刃、ただの旅人だ」

「藤原妹紅だよ」

藤原……確かに竹取物語の時代のお偉いさんと同じ名前の人気がいたはずだ

だが娘がいるとは聞いていない、ということは『隠しぐ』つてことか？

面白いこともあるものだな

だが藤原妹紅つて事はもう五百年とか昔の人物だよな
つて事は不老不死か……

「随分と辛い人生を歩んでるようだ」

「な、なによ、同情して欲しいわけじゃ」

「短い時を過ごす人間に永遠なんてまさに地獄だよ」

生き地獄、不老不死に『えられた罪を償うために』『えられた罰
俺はそんな風に思つてゐる

ただ不老不死がなんで罪なのかは知らないし興味もないが

「それはそうだけど、あんただつて同じでしょ」

「まあな、否定はしないけど、俺はこの永遠を楽しんでいる」

「楽しむつて、いつかはその楽しみも失われるよ」

「だったら作ればいい、自分の楽しみを」

それが俺の生き方であり、生きるうえでの道標である
だから今回も楽しそうなこの竹林に足を踏み入れた
そんなんじゃなればこんな場所に入るのは御免だ

「それにしても竹ばっかりで思つた以上に楽しいものはないな」

「あんたは此処を何だと思つたのよ」

「そうだな、千載一遇のチャンスがある場所」

「そんな良いとこには見えないけど……」

千載一遇を狙つてはいながら少しばかり楽しみがありそうだったとは言える

それで妖怪に襲われても大した問題でもない
出られなくなつたら少し問題だが、そんなときは地形を変化させれば良い

例えば霧を竹」と吹き飛ばすとか

「それよりも妹紅はこんな所に居ても大丈夫なのか?」

「私はこの辺なら詳しいから、出口へ行きたいなら連れて行くけど」

「ほお、それは頼もしい是非お願ひしよう」

出口への道を知っているか……

随分とこの竹林を知り尽くしているようだな

「こういう人材は仲良くしておいて不利に働くことはないな
少し友好的になつてみるか

「いlijahが出口だよ」

「よく、憶えているな、あれだけ方向感覚の狂いややすい場所の地形
を記憶するのは並の人じや無理だろ」

「そりや そうだろうね、あんたみたいに来るのが初めてなら案内人
を用意したほうがいいよ」

「なら今度から妹紅に頼もうかな」

くつくつと笑つて彼女は竹林に戻つて行つた

見知らぬ誰かと触れ合つのも悪くない

第七話 不死鳥と異端（後書き）

と書ひましたとで今回はもこたんとお

うちの小説のもこたんはなるべくじゅじゅ馬娘みたいな口調を田指しました

作者はもこたんの見た感じの年齢は現代の一五歳ほどの少女ぐらいだと勝手に思い込んでいます

だって、昔の人って高くて150センチほどが高いラインだったときいたことあつたんだもん

感想やアドバイス等々お待ちしております！

第八話 幻想の賢者（前書き）

今回はのんびりした雰囲気を出したかったです
あまり需要のない回かも……

第八話どうぞ！

第八話 幻想の賢者

幻想の賢者

藤原妹紅と別れて今、俺は幻想郷にあるとある神社を目指している

名は確か『博麗神社』と聞いた

その巫女は妖怪退治も行っていると聞いたからな、どんな人間な
のか興味を持つて行くことにした

そしてその神社への道を聞くために入里に向かっている所である

「人里へ行くだけで一体どれほどの妖怪と出くわした事が……」

そう、人里に行きたいのにもう十体ほどに襲われた
俺は襲われやすい体質なのかもしない

襲われやすい体質なんて考えたくもないな

「のんびり歩いていると本当に日が暮れるな」

主に妖怪に襲われてその対処して時間がかかる

やはり此処は……

「久々に空間を弄るか」

能力を使えば瞬間移動も容易い事であることが少し前に発見できた
大分昔に発見したからちゃんとできるか心配だがやるだけの価値は

あるだるつ

「確か、あれをこうして「これ」をこうして……」

鈍つた感覚を取り戻すかのようにゆっくりと能力で定義と矛盾を弄つていく

これは着いたころには疲れ果てているんじゃないのか?

「ふう……やっぱり止めよう、疲れ果ててしまつたら元も子もない」

仕方なく歩き出す

しばらく歩くと薄つすらと人影が見えてきた、おそらく人里の入り口に立つていてるのだるつ

その後方には家のような形も見て取れる

「到着かな、歓迎してもらえると嬉しいんだがな」

俺も一人の人間だからな、歓迎されたら嬉しいものだ
だが、何となく嫌な予感もある
何に対してかはよくわからないが

「まあいいか」

田の前にお世辞にも立派とは言いにいく門」とセレナの良い体つきの

男が立っている

おそらく門番だらう、妖怪の侵入を防ぐために

「待て」

「なんだ、ただじや通してくれないのか」

「見ない顔だ、注意を払つて損はない」

随分と仕事熱心な事で、だがこゝ言わると少しこうな
争い事は避けるべきだが……

「見ての通りただの人だよ」

「人の形をした妖怪だつている」

確かに紫とか妖力を感じなければただの人看見るよな

だつたら警戒されても無理もないか

拳句に腰に刀差してれば間違いなく警戒するか……

「んじや通してもらうにはどうしたらいいんだい？」
「人である証明をして貰いたい」

無理難題を……

俺はただでさえ人とは離れた状態だぞ……

あるいは害を与える気がないつてことを証明すればいいのかな

無理だな、口で言つるのは簡単だが信じてもうつのは難しい
だつたら実力行使か……なおさら駄目だな

「はあ……証人を連れて、出直すか」

そう言つて去りうとして時

「やつと、見つけたわ刃」

女性の声、やたらと聞きなれた大妖怪の友人の物である

「お、丁度いい所に偉人発見」

「その利用しようとしている態度は何?」

「ちつ……勘の鋭いやつだ

だがこちとら借りつてものがあるだから構わず利用するぜ

「この幻想郷に『博麗神社』っていう凄い神社があるって聞いてな

「そこに行きたいのね

「その通り」

なんか顎に手をあてて考え始めやがった
嫌な予感がしてきたぞ

「じゃあ、私について来て」

「何かわからないが良いだらう

そうするとスキマを開き中へ入つていく紫
続いて俺も入る

前よりも不気味には思わなくなつたがやはりこの空間の玉玉は不気
味だ

「なあ、紫」

「何よ」

「この空間の「デザイン」を変えていいか?」

「駄目よ」

駄目か……持ち主が言つなら仕方ない、我慢するしかない
不意に立ち止まる紫に危つべかりそつになりながらも足を止める

「どうした?」

「到着よ、私の屋敷に」

神社じゃないのか、がっかりだ
何か重い雰囲気があまり考えない方が良いか

どうかで考え方や説明は失敗の元だと聞いた

周りの風景が目玉から木造の建物に変わった

「お前の屋敷つてここか」

「やつよ、まあ座りなさいな」

居間らしき場所なのだろう、卓袱台ほどの高さの机と座布団が敷いている

紫の反対側の座布団に腰を下ろす

「で、こんな所に連れて来て何のつもりだ?」
「ただ単に貴方とお話をしたくてね」

こんなババアに惚れられても全くもって嬉しくないな
大丈夫思い過ごしだ

「お話つて？」

「それよりもお茶を出すわ『藍』お願いね」

少し遠くから紫とは別の女性の声が響いた
おそらく紫が『藍』と呼んだ人のものだらう

「使い魔か？」

「使い魔つて何よ式神よ」

そうか、こっちでは使い魔なんて存在しなかつたんだつた

式神つて確か……

陰陽師達に使役された妖怪の事を言うんだっけ？

それで有名なのが『前鬼・後鬼』とかつて鬼なんだよな

式神つてどんな妖怪でも対象にできるのかね

「それで、話つてなんだよ」

「身構えなくともいいわただの世間話よ」

妖怪の世間話つて一体どんなもなのなんだよ

「身構えなくていいって言われてもどんな話題を振られるのか分ら
ないしな」

「用心深いのね

「昔からさ」

そつ会話が一区切りした所で式神の『藍』が盆を持ってやってきた

黄色の髪と九本の尻尾を持つ美しい女性の姿をした狐の妖怪だ

「お茶をお持ちしました」

「「どいつも」」

湯呑を俺と紫の前に置いて部屋から去つて行った

「ずいぶんと静かな性格だな」

「まだ慣れてないのよ」

「日が浅いのか」

どいつもやら最近になつて式神にしたらしい

経緯はわからないが九尾の妖狐なんて早々出会えるものでもないぞ

「そんなことより本題に入らうか」

「そうね、貴方には色々との世界での決まりを教えなければなら
ないわ」

「「」教授願おうか」

どいつもやら俺の目的は分かつてゐるらしきな

「大した決まり事なんてないんだけどね」

「そう言つと思つたよ」

「でも住む場所を求めるなりできるだけ人里の中にしてね
「なんでだ?」

「それはやつぱり色々面倒になるからよ」

どいつもどいつも面倒なんだ……

住む場所なんて俺の好きでいいだろ

「住む場所なら俺の勝手にさせてもらいたい」

「貴方を野放しにしたら貴方を襲う妖怪が消えていく氣がするわ」

「今から全滅させてもいいが」

「ダメ、絶対」

「冗談なんだがな

まあ、危機に陥つたらさすがに抵抗するが襲われなければ攻撃はない

「とりあえず面白い場所へ行きたい」

「そんなこと言われても貴方の『面白い』の定義が分らないもの」

「ドンパチできればそれなりに面白いぞ」

「戦闘狂丸出しのセリフね」

「俺は断じて戦闘狂ではない！」

「決闘を見るのが好きただけだ

ただ最近は命のやりとりと言つた危機感を煽る戦いをしてないから
ちょっとだけ欲求不満かな

「最近は緊迫感ある戦いをしてない少し物足りないんだよ」

「貴方より強い奴なんてまず居ないわよ」

「探せばそこいら中にいるだろつ」

「俺自身、自分が強いなんて思つた事は一度もないがな
他人には普通より頭が一つ二つ抜けて強いとか言われる

人がどう思おうが俺には関係ないがな

「もう行つていいか？日が暮れる前に寝床を確保したい」

「なら泊つて行きなさい、久々に会つたんだから一杯やりましょう」

……お前様に甘えてる」

た その後、紫と飲み比べをしてすぐに紫が酔い潰れたのは余談であつ

第八話 幻想の賢者（後書き）

一話振りの紫です

この小説では紫さんはかなり登場しますw

何分、原作キャラで今のところともに会話が弾むキャラは紫しかいないんですねん(訳

次回あたりに白熱するバトルシーンを描きたいです!
出来るかは分からぬですがw

第九話 久々の再開（前書き）

すみません、先に書いておきます。
今回は原作キャラは一切出ません

紫様の活躍などを期待していた方には謝罪の意を
申しわけありません

では第九話ををお楽しみください

第九話 久々の再開

久々の再開

紫に一晩だけ宿を貰つた翌日、二日酔いで紫が起きれないらしいから一言礼を言つてその場を去つた

今、俺は人里の中にいる

どうやって入つたかと言つと、紫が手を回していたらしい

「全く、お節介な奴だ」

だが感謝はしている、俺にとつてこの里は色々と世話になる予定だからだ

人里に入りたかったのは『博麗神社』への道を聞くためだけではない妹である輪廻の居場所も知るためである

涼の話だと輪廻と涼自身は幻想郷のどつかに住んでいるらしいそれで輪廻は人里で随分と崇められているらしい

そんなことから輪廻を探すために人里に入れば手早く見つかるかもしれないという魂胆である

「どいつも聞いても『輪廻様』か……あいつは一体どんな能力に目覚めたんだ？」

単純に考えるなら「生命力に關した力」であるのがごく自然な考えだ人間には生きるうえで必ず『生命力』と呼ばれる物を秘めている

その生命力がどんな形で存在するかは分からないが、おそらくそいつたものを一時的に強化する事が出来るのだろう

「これはまた興味深い能力を持ったようだな」

あともう一人の姉の『沁華』の方も興味があるな
こいつは涼から情報を貰わないと探しようが無いがおそらく俺の想像通りの能力を持っているだろう

それにしてもこの人里、思つた以上に広い……

「こりゃ、輪廻を探すのはまた次の日になるかな

それにしてもこの人里……『医者が居ない』
とどのつまり、病や怪我になつた時にどうするのかが気になる

「まさか輪廻の奴が医者を凌駕しているから衰退して言つたのか……？」

…?

基本的に魔道の世界には一般的に火などを作り出す有名な『魔術』
様々な姿をした者を呼び出す『呪喚術』など数種類存在するが、『
治療術』と言うのは存在しない

というのも、人体に被害を与えるのは簡単だがそれを再生させる技
術は誰一人として開発、及び発展はしていないである

その治療術の元祖が俺の妹の輪廻である

全てにおいて死者を蘇らせるのは禁忌とされてきた、俺は何故かは
分からぬが昔からそう言われているらしい
だが輪廻の治療は『死者蘇生』おも可能にしている

医者では治せない怪我や病もあいつなら治療できる
だからあいつが『神の子』だとか『天才』などと呼ばれやすい

そういう能力の類なら「生と死に關した能力」と考へて方が無難
になる

「だがそしたら一部だけ辻褄が合わなくなるな……」

もうこの患者は捨てよう

このままだとこの考への答えを見つけるまで何日かかるか分からぬ

「ちょっと疲れたし団子でも頂くか……」

丁度、目の前に腰掛が置いてある店がある
団子の一文字もあるとこから店なのだろう

金ならあるし住まいのぼうはまだだが、能力で別空間に移動して雨
風をしぶぐつもりだから使っても大丈夫だろつ
一皿と茶を頼み腰掛に座る

「団子を食うなんて随分と久しぶりだな」

甘いものは好きな方だ、好んで食べたりはしないが嫌いではない

料理は比較的得意なほうだと思い込んでいる

「俺の舌こまは少し甘過ぎるかな」

お茶を啜りながら団子を頬張る

「隣、良いですか？」

女性の声、どこか聞いたことのある懐かしい声だ
相手の方に顔を向けると腰まで掛かる長い黒髪が目に入った

「どうぞ」

影の動きで軽く会釈しているのが分かる
顔は見ないのかって？誰だかもう分かるだろ

「随分と懐かしい顔だな」

「そういう兄さんも変わつてないね」

「久しぶりだな『輪廻』」

「久しぶり、兄さん」

隣に座つた女性は俺の妹でこの里で人助けをしている輪廻本人だった

黒く長い髪、漆黒の瞳、少し幼い顔つき

相変わらず可愛い顔をしている妹のである

シスコンつて言うな、分かつていてるつもりだ

「甘党のお前の事だから甘いものがある場所になら出没すると推測
していたら本当に会うと思わなかつた」

「探してたんですよ、兄さんらしき人物の目撃報告を耳にしたから」

「なんだ、団子目当てじやないのか」

「少しがつかりしているみたく聞こえるのは何故だうつ？」

「氣の所為だ」

甘いものを食べてる輪廻の表情が愛らしいなどと本人の前で言える

わけ無いだろう

それにもしても周りからの視線が刺されるのは何故だらう……

「なあ輪廻」

「なんでしょうか？」

「周りの目線がとても気になるのは何でだと思ひ？」

「さあ？」

ただの『氣のせい』だらうか？

少なからず敵意が向けられている『氣』がしないでもない
ちらほら殺氣に近いものを感じるのだが

「氣のせい」か……？

「たぶん」

夕焼けで赤く染まる空を見上げながら立ち上がる
暗くなる前に安静に出来る場所を確保したいからだ

「どうしたんですか？」

「寝床を確保しようと思つてな」

「まだ家は無いんですか……」

「来て一日で持つてた方が凄いと思つが」

額に人差し指を当て少し顔を上げる仕草をする輪廻

いつも何かを考えるときにとつている仕草だ

意外と癖の多い妹だから見ていて飽きない

「んじゃ俺は行くぜ」

「あ、待ってください」

「どうした？」

「もし問題が無いなら私の家に来ませんか？」

くそ、上田遣いなんてセコい真似しやがって……断りたくても断れないだろ……

あまり他人の家に泊まりたくないんだがな

「んじゃ、お言葉に甘えて」

「えへへ～久しぶりに兄さんと一緒にですね」

もう輪廻を抱きしめてもいいだろうか？

こんな可愛い妹なんて早々いないだろう

本来と外れた思考をやめて輪廻の後を追わなければ

歩いて人里から少し離れた所に小屋が建っているその小屋の扉の前で輪廻は立ち止った

「あまり広くないんですけど、どうぞ」

そう言って扉を開けて招待する

外装と違つて中は女の子らしい可愛らしいものがいろいろ置いてある

「随分と自分の趣味を詰め込んだな」

「一人で暮らしているから良いじゃないですか」

まあそなうなんだが……

可愛いいぬいぐるみが寄りかかっている壁に描いてある魔法陣とかは

「どうにかしてほしい
微妙にホラーだ

「どうあえず、お茶でも淹れようか」

「兄さんはそこいら辺に座つていてください、淹れてくるんで」

妹にもてなされる兄つて第三者から見たらシユールなんだろうな
座布団に座つて待つていると湯呑を乗せた盆を持つて輪廻がやつて
きた

「どうだ」
「どうも」

湯呑には普通に緑茶が入つていた

「変な薬とか入つてないよな?」
「『安心ください、そこまで兄さんを実験台にするほど腐つてはい
ません』

笑顔は良いが、前に妙な薬を入れて死にかけたのは何処の誰のせい
だよ

まあ折角淹れてくれたから飲むんだが

「普通に緑茶か……」
「もう、疑い深いんですから」
「そうさせたのはお前のせいだがな」
「えへへ~」

可愛いがまた変な薬入つていたらただじゃおかなかつたぞ

だが一度安全だとわかれば疑う必要もない

「そう言えば何で兄さんは私を探していたんですか？」

「妹の事を心配しない兄はいないだろう」

「素直に会いたかったって言つてくれれば良いの?」

「うるさい」

久々に妹と過ごす時間は意外にも楽しい一時になつた

また薬を飲まされると思っていたけどそうでもなかつた……

あれは洒落にならないからな

第九話 久々の再開（後書き）

今回は妹が登場しました

キャラ設定等は後々……

投稿がだいぶ遅くなりました（いつも遅いけど）
まあ、いい訳としては風邪をこじらせてしまって
お恥ずかしい限りです

様態は良くなりました本調子ではありませんが……
まだ喉が良くないので風邪が完治するまで少し更新は遅くなる気が
します（いつも遅いけど）

では感想やアドバイス等々お待ちしております

第十話 神々の眼差し（前書き）

記念すべき第十話です

今回は原作キャラを登場させました！

でも今回はかなり短めだと思われ（字数はわかりませんw）

ではお楽しみください

第十話 神々の眼差し

神々の眼差し

輪廻に一宿の恩としてケーキを作つてやつてそのまま旅立つた
幻想郷から一度外に出た
理由は前に住んでいた小屋を取り壊すためだ、残しておくと環境的に
宜しくない

それに一つ面白そうな話も聞いたからだ

「諏訪大社か……神が治める地とは実に興味深い」

その地の人間には神が見えているのか?
とか、どんなご利益を頂いているのか?
などなど興味を持つ

諏訪と言えばミシャグジ様とか聞いた事はあるだろつ
祟りとかそういうものが専門の神だ

実力はあるが地を治めているなんて初耳だつたから興味がわいた

「諏訪湖と言えばもつと南下しないと駄目か」

俺の小屋は少し北の方にある為、諏訪湖を目指すなら一度南下して
から西へ向かうのが楽だ

飛んだり能力使えばすぐに着くのだがそれでは面白みがないだろつ
地図を広げ自分の現在位置を確認しながら整備されている道を歩く

歩き始めて約2週間、顔見知りの妖怪の力添えもありかなり早く目的地に到着した

「中々立派な神社じゃないか」

堂々と聳え立つ鳥居、境内はしっかりと掃除されている
「利益がある分、沢山の参拝客が確認できる

まずは軽く祈願をしてから境内を見回るか

賽銭箱に近づき五円玉を投げ入れ手を合わせ軽く念じる

（どうか涼が早死にしますように）

祈願の内容なんて適当でいいのさ

別に望んでいるものなんてないんだし

早々に境内を散策し始める

「なんだかずっと監視させられている気がする」

ずっと感じる視線、すぐそばに居そうなのになぜか遠くも感じる
実に不思議な感覚だ、これがもし神の気配ならば尚更な

気配のする方向に刀の切つ先を向ける
しばしの沈黙が辺りを包みこむ

不意にその方向から少女の声が響く

「へえ、私を感じ取れるなんてちょっと驚きだね」

「馬鹿にされていたように聞こえるぞ」

「それは失敬」

木の蔭から金髪で独特な帽子を被つている少女が現れた

「なんだ、ガキか……」

「ちょっと！ガキって何よ！」「

「子供には用はないんだ」

そう子供には用はない

俺は神に会いに来たのだから

「んじゃな、暗くなる前に帰るんだぞ」

「ちょっと待てえええい！」

いきなり飛び膝蹴りをくらつた

一体この幼女は何なんだよ

自己紹介を聞いてほしいのかない胸張つて自慢げに宣言した

「私は洩矢諏訪子、こここの神様だ！」

「……んで？」

「驚けよ！－」

だつて神力駄々漏れだし、人にしても影薄すぎるだろ
普通に話の流れからしてすぐに勘付くよね？

「もう一つお前みたいに神の気配を感じれるんだが、もう一人いるのか？」

「随分と生意気な口を利くね」

「少なくともお前よりは長生きだしお前程度に負ける気もしない、よつて敬語の必要はない」と判断した

「この……人間のくせに」

「人間舐めんなよ」

実際お前たちの存在も元々人間が作ったものだしさ
生半可な神になら勝てる自信はある
所詮神つていつたつて一つの事に対して凄いだけだし

「なんだい諏訪子、また弄られているのかい？」

「神奈子～この男が虐めるよ～」

「人聞きの悪い、お前が弄つてほしいうて言つていたようなものだ
ろ？」「う

いきなり現れた少し神々しい女性

こいつは一目で分かる、神様だ

て言つかなんで神が一つの神社に一人もいるの？

まあいいやそんな事は大した興味ないしな

「参拝しに来たのかい？」

「神に会いに来た」

「変った男だね」

「よく言われる」

「こいつとなならそれなりに楽しい会話ができるそつだ
相手が子供だと疲れる

だが会つたからもう目的は達成したな
そろそろ帰るか

「さて、目的は達成したし帰ろう」
「おや、もう帰つてしまつのかい？」
「俺の目的は神に会うだけだからな」
「宿はあるのかい？」
「自分で何とかする予定」
「じゃあ一日どうだい？」

またこういうノリなのか……
だがただで雨風凌げるのならそれに越したことはない

一晩だけお世話にならう

「ではお言葉に甘えて」
「いきなり礼儀正しくなつたね」
「首を刎ねるぞ」
「いめんなさい」

神奈子といつ神のお言葉に甘えて一晩だけ宿を頂いた

神とどんなことしたかと言つと、お神酒で飲み比べをした
まあ結果は紫の時と同じく大した飲んでもいいのに倒れやがった
こんなにも早く倒れるなんて思わなかつたな

一晩の恩を手料理を振る舞つことで返した

帰り際には神奈子ときつこ握手を交わした
あんな感じのやつなら仲良くなれそうだ

「中々有意義な時間だった」

あまりのんびりしてると幻想郷に戻つたときには家を造る時間がなく
なるな

急いで帰らうとしたとき、後方から制止の声が響く

「なんだチビ神、早く戻つていろいろしないといけないんだが」「
もう一回そう呼んだらぶちのめすよ」「やれるのもんだつたらやつてみる」「
つて、喧嘩しに来たんじやないんだつた」

このチビ神一体何なんだよ

制止しておいて漫才しに来たなんて言つたらぶつ飛ばすぞ

「あんた家ないんでしょ」「そりや移住している最中だからな」「一つ恵んであげよつか?」「
大きなお世話だ、気持ちだけいだくよ」「なんだい、人の親切を無駄にして」

親切つて言つたつて家の「デザインが俺の好みじや無けりや元も子も

ないつて
氣持は嬉しくもあるがな

「んじやこれ持つて行きなよ」「神社で売つてるお守りか、どつも」「今回だけただでくれてやる」

ここでも素直じゃないな

可愛げはあるが……輪廻の方がかわいいな

「んじゃな、気が向いたらまた来るよ」

「もう来るな」

子供みたいだ

そう言えば当初の目的とだいぶ変わってしまった気がして
どうでもいいか……

このあと幻想郷に戻る為に移動魔法を使つたが真夜中になつてしまつてた

「今日は野宿か……早々に家を作らなければ」

第十話 神々の眼差し（後書き）

ところへ」と諏訪子＆神奈子でした

活動報告の方に登場キャラのリクエストをして決まりました
今もリクエストは募集しています

感想の方にちらつと書いたり活動報告のコメントに書いていただけ
れば出していきたいと思います

それでは、感想やアドバイス等々お待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7074w/>

幻想昔神紀

2011年11月29日19時55分発行